横浜の坂道 ⑨
翠嵐高等学校

昭和二十年代初め、毎朝道いっぱいに広がって坂を上った

文◎深澤経一（神奈川区在住）

お粥腹ではこたえた松ケ丘の坂、沢渡の坂

神奈川区では丘陵と沢とが幾重にも続き、丘を上り下りする多くの坂があるが、初代広重が描いた神奈川宿の台の坂以外はほとんど無名である。

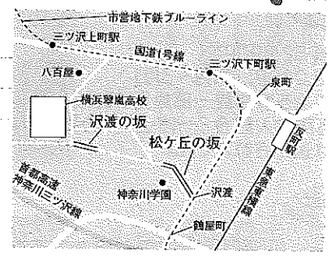
大正三（一九一四）年、三ツ沢の丘の上に神奈川県立第二横浜中学が開校した。いまの県立横浜翠嵐高校の前身で、九十四年間に二万五千人以上の卒業生が坂道を上った。そして多くの社会貢献者を輩出したが、その中に高木東六（作曲家）、土門拳（写真家）、草柳大蔵（評論家）の名が見出せる。

大正十五（一九二六）年東横線が開通して反町駅ができ、それを利用して登校する生徒が増えた。学校までは一・五キロメートルで約二十分歩いた。彼等はその間、松ケ丘の坂、沢渡の坂という無名の坂を上って登校した。旧制中学から新制高校卒業まで、昭和二十（一九四五）年から二十六（一九五一）年まで六年間在学してその坂を通った一人として私は当時の通学時の様子を思い出してみる。

反町駅を降り、現在の道の半分以上狭い駅前の道を二百メートルほど三ツ沢方向へ向い、泉町を横浜駅西口に向けて左に曲がる。もちろん歩道は無く狭い。朝は神奈川学園の女子生徒と我々が、その道を同時に通った。彼女らは我々を山猿と呼び、我々はそれ以上ひどい呼び名をつけて応酬した。五百メートル歩くと沢渡の十字路で、我々は右折して松ケ丘の急な坂を三百メートルほど上る。戦後の食料の乏しい時は朝飯のお粥腹ではこたえた。松ケ丘は町名のとおり老松が多く見られ神奈川区随一の屋敷町で、豪邸の中でも、坂を上り切った所にある邸宅は純洋風でひときわ目立っていた。しかし終戦後間もなく米軍に接収されてしまった。

それから先は学校まで五百メートルの一直線の道で、右側は豪邸の白い房総石の石垣が遠く見えなくなるまで続き、左側は沢渡が地名の沢状の低地で二十メートルの崖になり、ほとんど家が無く対照的な景色だった。

昭和二十年代の初めは自動車が通らないので、登校生が道いっぱいに広がり、一団となり坂を上った。当時、私は時計を持っていなかったので、その群れの位置から遅刻しないかを判断していた。道の最後で沢渡の坂は急になり、その右側の百メートルほど続く石垣の奥に平沼亮三（一八七九～一九五九年）邸が老松に囲まれて建ち、その豪華さは際立っていた。地元出身の実業家・政治家であり、日本体育協会会長・横浜市長を歴任され、文化勲章を受章された有名人である。隣人の誼で我々にお話をしに来校されたこともあった。



米軍に接収された学校環境の中で

平沼邸を過ぎると学校に着いた。中学は珍しい平屋建ての校舎であった。入学して五カ月で終戦になり、それまで工場動員されていた上級生が学校に戻り、大勢なのに驚いた。学校としても創立以来最大の危機に直面したと思う。戦争から占領・平和至上主義へと価値観が一変し、従来の教科書は使えなくなった。英語は文法、数学は因数分解、化学は分子記号を習った記憶があるが、文科系の科目で何を習ったか、記憶は少ない。若い歴史の先生から中学時代に文明と文化の違いを質問され、答えに窮した。すべてがいまだ整っていない時代だった。

終戦直後、学校・生徒にとって驚くべき重大事件が起こった。

なんと講堂・プール・校庭の三分の一が接収されたのである。校庭には有刺鉄線が張られ、直ちにカマボコ兵舎が幾つも建った。プールの周りも同様である。グラウンドも彼らが野球をする時我々は使えなかった。学校が米軍基地の中にあったようなものである。

そのような環境の中でも、とにかく学校へ行くのは楽しかった。弁当箱の中には半分ぐらいの麦飯か薩摩芋ぐらいしか入っていなかったし、冬でも裸足だった。しかし、いじめも不登校も無かった。そして若さと元気があった。誰かが接収されたプールで泳ぎたいと言い出し、米兵が夜間泳ぎ終わった夜中に柵を越えて泳いだ。毎日米兵が楽しそうに泳ぐ姿をそばで見ていたので、やったぞという達成感と、抵抗した満足感を味わった。しかし巡回してきたガードマンに見つかり逃げ回った。

接収は我々の卒業後も続いたが、世の中も少しずつ落ち着き、スポーツ以外の文芸部、演劇部、歴史地理研究会など自由に高校生活を楽しみながら坂道を登下校した。その仲間である同期生に、「追いつめる」で直木賞を受賞（一九六七年）した生島治郎、「誰かが触った」で芥川賞を受賞（一九七二年）した宮原昭夫、「課外授業」（一九七八年）で日本推理作家協会賞を受賞した青木雨彦（コラムニスト・評論家）がいた。彼らと一緒に学べたことは誇らしい。

六十年後の今、通学路にはバスが通り、坂を歩く生徒は少ないらしいが、初代滝沢又市校長が掲げた「大平凡主義」は九十年以上過ぎた今も三ツ沢の丘に受け継がれている。

横浜翠嵐高等学校正門

戦後、進駐軍に接収された校舎全景。左下に進駐軍のトラックが数多く駐車している（提供／県立横浜翠嵐高等学校）

坂を上って通学する現在の翠嵐高生

昭和20年代初め、歴史地理研究会の記念写真（前列左上から下へ）渡辺静夫、深澤経一（著者）、生島治郎、助野健太郎先生、後藤（後列左上から下へ）田中一正、村瀬和男、石川岩男（敬称略・写真提供／著者）